

名 広島弁のデカイイケおじヤクザの組長に過保護とい  
話 の無自覚ストーリーカーでクワザの首締めセックスされる

浅野 つむぎ（あさの つむぎ）：私。推し活（アイドルグッズ、ライブ遠征、同人誌など）にのめり込み、金欠状態。会社が突然倒産し、生活に困って神保組の事務員として働くことになる。

神保 直哉（じんぼ なおや）：神保組の組長。2メートル巨軀40代前半。広島弁を話す明るく人懐っこい笑顔が特徴だが、実際は重度の独占欲・ストーリー性を持つヤクザ。

なつき ：私の親友。スナックで働くシングルマザー。面倒見が良く、私に仕事を紹介するきっかけを作る。

大和くん ：なつきの小学1年生の息子。

ママ： なつきが働くスナックの店主。神保直哉の知り合いで、つむぎに事務の仕事を紹介する。



給料日の前日、私はネット銀行のアプリを開いて、盛大なため息をついた。

先月の引き落とし履歴は、我ながらひどいものだった。推しのアクリルスタンド、コラボカフェの予約、勢いで買った缶バッジ三十個、同人誌の新刊十冊、ライブ遠征の飛行機代、地下ドルへの差し入れ三万円分。給料口座は毎月ギリギリで、足りない分は貯金から移してしのいでいた。その貯金も、とうとう底をつきかけている。残高、二万三千円。これが今の私の、全財産だった。

（まあ、今日給料入るし。そこから立て直せば。）

そう言い聞かせて、日付が変わるのを待った。給料口座を更新する。残高、三円。

何度更新しても三円だった。給与が入っていない。

（ネット銀行ってエラーになるって聞くし、たぶんそれだ。明日には入ってる。）

無理やり自分を納得させて、私は布団に潜った。

◇

翌朝出社すると、フロアの様子が違った。入り口に張り紙、困惑した顔の同僚たち。やがて本社からスーツの男たちがやってきて、会議室に集められた私たちに、淡々と告げた。

「皆さん、急な集まりに応じていただき、ありがとうございます。大変重く、心苦しい報告をしなければなりません…。えー、結論から申し上げます。当社は、これ以上の事業継続が困難となり、昨日をもって営業を停止し、破産手続きに入ることを決定いたしました。」

「え？」

頭が、真っ白になった。会議室に集められた社員たちは、本社から来た男性に  
あーだこーだと文句をぶつけていた。男性は、ただ平謝りするだけで、話が一向  
に進まなかった。その後のことはよく覚えていない。頭の中にあるのは引き落と  
し残高の数字と貯金二万三千円、給料口座三円、そして引き落とし予定の多額の  
金額。

家に帰って、私は親友のなつきに電話した。呼び出し音の途中から、もう泣い  
ていた。

「ねえ、どうしよう…会社、倒産しちゃった…」

短い沈黙のあと、なつきは言った。

「わかった。今から来られる？開店前に、少しだけ話そう」



開店前のスナックは、昼間の顔をしていた。椅子が逆さにテーブルへ上げられた、明るい店内。なつきの隣には、小学一年生の大和くんがいて、私の顔を見るなり言った。

「つむぎちゃん、目赤い」

「うん、ちょっとね」

なつきは私の話を最後まで聞いて、盛大に頭を抱えた。

「はあく……。つむぎにスナック勤めは絶対無理だよ」

「同感だよ」

「あらあら大変だったわねえ…」

そこへカウンターの奥からママが声をかけてきた。五十代くらいの、綺麗にセツトした髪に赤い口紅の似合う人だ。

「事務のお仕事でよかったら、紹介できるかもしれないわよ。昔からお世話になってる人なの。若い時に広島から出てきた人で、いまだに広島弁が抜けないみたいだね」

ママはくすくすと笑ってスマホを取り出すと、どこかに電話をかけた。低い声で二言、三言。すぐに切った。

「面接、今夜来ていいって。履歴書もいらないうって。どうする？」

頭の中で、預金残高の数字が並んだ。仕事を選んでいる暇なんかない。

「――行きます」

私は、即答していた。

◇

繁華街から一本入った路地に、そのビルはあった。古びた外壁、表札もない、薄暗いエントランス。

このビルで合っているのか？と半信半疑になりながらインターホンを押すと野太い声が聞こえてくる。

「はい」

「あッ…!!」

私のノミの様な心臓が跳ね上がった。顔が引きつりそうなのを堪えて拳に力を入れる。

「め、面接に来た浅野と申します。」

すると解錠音がして、重い扉の向こうに、黒いスーツの男が立っていた。三十代くらいで短く刈り上げた髪。事務的な声で案内されるまま、厚い絨毯の廊下を歩く。自分の足音さえしない。

途中、壁際に立っていた若い男たちが、私が通るとじろじろ視線を向けてきた。一人じゃない。二人：三人。敵意ではなく、珍しいものを見るような目でじろじろとこちらを見ている。

(なに、なんで見てくるの。)

目を合わせないよう、早足で歩いた。突き当たりの階段を、案内役の男が先に

上がる。緊張で、うまく息が吸えない。ふと、男の袖口から、刺青のようなものが覗いているのに気づいた。気のせいじゃない。私は、唾を飲み込んだ。

三階の大きなドアの前で、男が立ち止まる。大きな拳で三回ノックをして声を張った。

「失礼します」

「ほい」

間延びした声がして、案内人が扉を開く。

（うわ、でかい。）

それが、最初の感想だった。奥の椅子から立ち上がった男は、2メートル近い身長に、スーツの上からでもわかる肩と胸の厚み。年齢は、三十代後半から四十代前半くらい。整った顔に、穏やかな笑みを浮かべている。大きな部屋に革張り

のソファがローテーブルを挟んで2つ。部屋の角には大きなモニターに防犯カメラの映像がたくさん映っていた。

「ようきんさったね。まあ座りんさい」

ママの言っていた通り、広島弁だった。圧倒的な体格と、人懐っこい笑顔のギャップに、私は一瞬固まった。

促されるまま革張りのソファに腰を下ろすと、男も向かいにどさっと座った。香水とタバコの混じった、大人っぽい匂いがした。胸ポケットから名刺を取り出し、机に置いて、深々と頭を下げる。

「神保直哉いいます。神保組の代表をしております」

「…組？」

「…ん？」

「神保組って…あの…」

「あれ？聞いてらんかったん？悪い人じゃのう」

くすくすと目の前で笑う組長に私は、今日2回目の顔の引きつりを我慢した。神保組はこの近郊一帯を牛耳っていて、頻繁にネットニュースにもなっている組織だった。

（人生最大のミス。普通にハローワーク行けばよかった……！）

人生でこんなに顔が引きつるような事があってはならないと、逃げるなら今だ!!心の中の私が叫んでいるが、顔が濡れた主人公の様に力が出ない。

「浅野…つむぎちゃん…やったね？事務の仕事、ずっとしてきんさったんじゃね。」

「はい、就職してずっと事務員です。」

「そうか。えらいのお。」

「ああ、いえ…」

「…金に困っとるんじゃろ」

じ、とこちらを見て来る。私は肩をピクリと揺らして小さく頷いた。

「……はい」

その瞬間、組長はパッと顔を明るくして、大きな手を、ぽんと叩いた。

「よし、ええ子じゃ！正直に言うてくれてありがとうのう」

「へ？」

拍子抜けした。怖い人だと思っていたのに、なんとというか——ただの、明るいおじさんだった。

組長は鼻歌混じりにファイルから書類を一枚、机に滑らせた。月給45万円。目を疑う金額だった。

「仕事は書類整理と電話対応がメインで……」

「へっ……？て、てつきり、人殺しとか拳銃で、抗争に参加するとか……」

「あはははは！なーにおかしなこと言うてるんじゃ！面白い子じゃのお！」

ケラケラと大きな口を開けて豪快に笑う組長は、目尻に涙まで浮かべていた。

「はあーっ、ふふ、そがいなことさせんよお。本当に事務ができる若い衆がおらんくて、困ったところじゃ。ほいで？やってくれるんじゃろ？」

2万3千円……と、3円。親に「推し活で破綻寸前だから助けて欲しい」なんて、口が裂けても言えるわけがなかった。

「——よろしく願います」

私は覚悟を決めて頭を下げた。全てお金のため。

「おっ！ええ返事じゃ！ほいじゃ、明日から頼むわ。9時に来てくれたら、それでええけえのう。」

兵頭、つむぎちゃんを家まで送ってやり」

案内役の男——兵頭さんが、軍隊のように頭を下げて、ドアを開けた。

「困ったことがあったら、すぐに言いんさいよ」

「あ、ありがとうございますっ！」

組長はゴツゴツした手を、ひらひらと振って笑っていた。

◇

仕事は、本当に説明通りだった。書類整理、電話対応、来客のお茶出し。デスクが四つ並んだ、拍子抜けするくらい普通のオフィス。一緒に働く事務員…と言ふよりも組員達とは数日で普通に話せるようになった。その中でも、私と年齢の近い田村くんという男の子がいた。この人のおかげで話せるきっかけが出来たと言っても過言ではなかった。

（意外と、なんとかなるかも。）

そう思った昼時、デスクに、とん、と弁当が置かれた。

見上げると、組長が立っていた。相変わらず身長が大きくて天井が低く見える。目線の先の小さなお重のようなお弁当箱は黒くて立派で、組長が蓋を開けると出汁巻き卵、焼き魚、煮物などのレパートリー豊富なおかずにつやつやの白米。

「うわぁ、美味しそう…！」

「食べんさい。うちの若いもんに作らせたんよ。口に合うとええんじゃがのう」

「え！いいんですか?!」

「うんうん、ええよ。いっぱい食べて大きくなりんさい」

大きな手が、ぼんと私の頭に乗る。全く悪い人には本当に見えなかった。

その日の夕方、仕事を終えて帰ろうとすると、エントランスに黒塗りの車が止まっていた。

「送ります」

「え、結構です、電車で——」

「組長からです」

有無を言わせない一言だった。私は大人しく車に乗った。弁当も帰りの車も、毎日用意されていた。それが当たり前になるまで、そんなに時間はかからなかった。



三日目の朝、出勤するなり兵頭さんに三階に行くように言われた。私は何かしてしまっただろうか。緊張しながら階段を上がって大きなドアをノックすると、間延びした声が聞こえた。ドアを開けると組長はソファでニコニコしていて、座る様に促された。

「こんなむさ苦しい中でよう頑張つとるけえ、これやるわ」

差し出されたのは、小さな黒い猫のぬいぐるみだった。キーホルダーになっている。丸くて、つぶらな目で、思わず可愛いと思った。

「鞆のそこ、空いとるやろ。ぴったりじゃと思うてのう」

受け取ろうと手を伸ばすと、組長の少しだけカサついた指先が触れた。

「…ありがとうございます！可愛いです」

「気に入ってくれたら、うれしいわ」

次の瞬間、組長が向かいのソファから立ち上がるとどかっと私の隣に座った。太ももがぴったりとくっついて緊張で動けない私に、組長は気にも留めずスマホと充電器を渡してきた。

「この携帯はのう、社用じゃ。充電器も一緒に使いんさい」

「あの、そこまでしていただかなくても——」

「まあ聞きんさい」

組長は画面を操作して、電話帳を開いた。見慣れない名前がずらりと並んでいる。幹部たちの名前だった。

「困ったことがあったらここに連絡しんさい。誰かしら繋がるけえ。つむぎちゃんのこともちゃーんと話してあるからもう。あー、あと」

組長は別のアプリを開いた。Signalだった。

「連絡はこれを使いんさい。他のアプリは取れんようにしとるけえ、そこだけ注意してな。逆探知されやすいアプリは使わんこと。これが一番安全じゃ」

「あ、ありがとうございます。」

私はぬいぐるみを鞆の金具に通しながら、この人はなんだか過保護だなあ、と思っただ。

◇

休日、なつきと久しぶりにカフェに行くことになった。なつきがいなければ仕

事は見つからなかったし、お礼も兼ねて私から誘った。大和くんも一緒に、席に座るなり、いつものように私の膝によじ登ってきた。

「大和、重くなったね」

「ちがう、つむぎちゃんが細いんだよ」

なつきが「どっちも正解」と笑うと、オーダーを済ませてお礼と他愛もない話をした。なつきは相変わらず聞き上手で、私はようやく少し息が抜けた気がした。

——その時だった。入ってきた人影に息が止まった。組長だった。

店内を見渡して、私と目が合うと、ニコリと笑って当然のようにこちらへ歩いてくる。

「あれ、おったんか。奇遇じゃねえ」

なつきが私に口を寄せて、小声で聞いてきた。

「このおじさん、誰？知り合い?!」

「……今、働いてるとこの代表」

「え?!」

なつきはすぐにパッと顔を明るくして、「ママの知り合いの方ですか？いつもお世話になってます」と頭を下げた。組長も「おー、噂のなつきちゃんか」と、あつという間に打ち解ける。さすが、夜の蝶。溶け込むのが早すぎる。

その時、組長の視線が私の膝の上に落ちて、一瞬だけ、笑顔が揺れた。私は組長のあのニコニコ笑顔の目の奥が、すっと冷えるのを見てしまった。その目つきは子供に向けるモノじゃなかった。

でも、それはすぐに、いつもの懐っこい笑顔に戻って組長は、大和くんの目線に合わせるように、ゆっくりりしゃがんだ。

「名前は？」

「…大和」

「ふうん、ええ名前じゃねえ。」

「おじさん、誰？」

「おじっ…?!ま、まあ、そうじゃのう。おじさんじゃのう…う、うん。わかつとったよ。自覚が足りんかったのう…」

大和くんは組長を不審者扱いしているのか、ジッと据わった目で見ているが、普段ニコニコと余裕たっぷり組長の笑顔が引きつって、不覚にもかわいな、なんて思ってしまった、少しだけ笑ってしまった。

「つむぎちゃん、笑わんといってくれんか」

「あ、すみません、つい。」

「ごほんっ…、あー、わしは神保直哉いうもんじゃ。以後、お見知り置きを」

「神保おじさん」

「わし、そがいに老けて見えるか？…いやいや、そうじゃのう。年齢に争うたら

いけんのう。……ありがとうのう、気づかせてくれて」

「もー、すみません。ダメでしょ大和！」

頭をボリボリと搔いて困った様に笑う組長は優しい声だった。

「ところで大和くん。つむぎちゃんの隣は、わしの場所じゃけえのう。……ちいと膝から退いて、お母さんところ行ってくれんか？」

大和くんは、じっと組長を見つめてから「わかった」と言って、テーブルの下をくぐり、なつきの隣に収まった。

そして、組長が私の隣にドカリと座ると肩が触れそうな距離だった。なつきからは見えないテーブルの下で太ももがびったりとくっついて、少し離れても、追いかけるようにまた詰めてくる。なつきはそんなことも露知らず、組長と楽しそうに話していた。



組長の「気にかかけ方」は、少しずつ細かくなっていった。ある朝、出勤するなり言われた。

「昨日、コンビニ寄ったんじゃろ。夜遅うに甘いもん食べたらいけんよ」

「……え？」

私は一瞬、言葉に詰まった。昨日は残業で、帰りの車を断って、一人で帰った。コンビニに寄ったのは、誰とも会わない夜道の途中で、レシートだってもう捨てた。私が何を買ったかなんて、誰も見ていないはずだった。

「……なんで、知ってるんですか」

組長はにこりと笑うだけで、答えなかった。目尻に皺が寄って、いつもの懐っ

こい顔。

背筋を汗が滑り落ちた。一人だったはずの夜道に、誰かの目があった。そう考えた瞬間、鼓動が速くなる。でも——次の瞬間には、もう別の声の頭の中で言うのだ。たまたま見かけただけかもしれない、と。深い意味なんてない、と、違和感を流した。

別の日には、友達とランチに行った店を言い当てられた。

「つむぎちゃん、三丁目のイタリアンレストランにおったじゃろ？あそこ美味しかったか？今度わしと一緒にいこうや。ちなみに、あそこらへん物騒じゃけえ、夜は1人で行ったらいけんよ？」

「え…？あ、はい…」

責められているわけじゃないし怒られているわけでもない。むしろ全部、「心配」の形をしていた。だからこそ、逃げ場がなかった。怒鳴られたなら、怖

いと言える。殴られたなら、逃げられる。

全ての行動を把握されているみたいで背筋が凍った。

◇

ある昼休み、給湯室でお茶を入れていると、若頭補佐の山崎さんが入ってきた。冷蔵庫から缶コーラを取り出して、こちらを振り返る。

「つむぎさんも、飲みますか」

未開封の、冷えた缶を差し出してくれた。

「いいんですか？ありがとうございます」

受け取ると仕事に慣れてきたか、わからないことがあれば聞いてくださいと、

山崎さんは気さくに話しかけてくれた。その時だった。給湯室の空気が、ふっと重くなった。

振り返った山崎さんが、背筋を伸ばした。

「ご、ご苦労様です」

そう言うと、逃げるように出ていく。組長はニコニコしながら、山崎さんの背中を見送って、それから私の手の中のコーラを、じっと見た。

その缶を私から取り上げて、ゴミ箱に投げ捨てるどドカッ、と鈍い音がした。

「知らん人からもろうたもん、飲んだらいけんよ」

「え、えと、知らない人じゃないですよ？山崎さん、何度かお世話になってますし」

組長の笑顔が一瞬だけ止まった気がした。

「ふーん。お世話に…ねえ…。何に、お世話になったん？」

「あ、えっと、書類の場所を教えてもらったり…。」

「ふーん、そうかいの」

組長は短く相槌を打って、ゴミ箱をちらりと見て、また私に目を戻した。

「ま、ええわ。でもなあ、つむぎちゃん。この世界じゃのう、未開封が一番危ないんじゃ。プルタブのところにちよちよいと細工して、開けた瞬間に混ぜるようにする奴がおる。ほんで、ふらふらになったところを連れて行かれる。…ようある話じゃ。覚えときんさい」

それだけ言って組長は何も言えない私の頭を、ぼんと撫でた。

「わしがおる間は、何も心配せんでええけえ。わしがぜーんぶ見とるけえね」

「あ、ありがとうございます…」

その言葉が心配なのかなんなのか、私にはわからなかった。

組長は捨てたコーラのことなんて忘れたみたいで、にこにこ続けた。

「そういえば、つむぎちゃん。すき焼き、好きじゃったよなあ。わしの知っとるうまい店があるんじゃ。今日どうじゃ？」

すき焼きが好き——確かに好きだ。でも、そんな話この人の前でしたことがあったらどうか。少なくとも、組長に直接言った覚えはない。

「ああ、えと…すみません。この後、予定があつて」

「……ふーん。ほな、しかたないの。また誘うわ」

ほんと私の頭を撫でて、給湯室を出ていった組長の目の奥は笑っていなかった

気がした。

デスクに戻って、私は隣の田村くんに小声で聞いた。

「私がすき焼き好きって、組長に話しましたっけ」

「さあ：言っていないと思いますけど…：てか、すき焼き好きでしたっけ？」

「この前の通話で…：遠征の話してた時に、あ、ほら、ほのかちゃんもすき焼き好きじゃん、って流れで」

「あー、そんなことも、ありましたね。あ！」

田村くんが、ぱっと顔を上げた。

「そういえば、ほのかちゃんが好きなすき焼き屋さん、ついに発覚したんですよ。

今度、一緒に行きませんか？」

「え、まじですか?!どこ!？」

さっきまでのもやもやした感じが嘘みたいに吹き飛んだ。それからしばらく、私たちはほのかちゃんの話で盛り上がった。組長がなぜすき焼きのを知っていたのか——その引っかけりは、その頃にはもう頭のどこかに消えていた。



田村くんとは、推しが同じだとわかってから、よく話すようになった。

最初に距離が縮まったのは、入社した直後の休憩中、私がこっそり推しのアクリルスタンドを眺めていたのを、見咎められたからだ。

「浅野さんって、オタクなんですか」

「……バレましたか？」

「隠せてないですよ」

ほのかちゃんという女性アイドルが、共通の推しだった。最新曲がどうか、

センターの子の髪型が変わったとか、他愛もない話で盛り上がる。社用携帯のアプリに田村くんからメッセージが来るようになったのも、通話するようになったのも、自然な流れだった。事務所の張り詰めた空気の中で、田村くんと話す時間だけは肩の力が抜けた。唯一、ただの「私」に戻れる相手だった。

——だけど、ある夜を境に、田村くんの様子が目に見えておかしくなった。

「浅野さん、最近、誰かにつけられてないですか？」

「え……？」

「あ、いや…なんでもありません。ただ、ちょっと気になって…。何かあったらすぐ言ってくださいね！」

「は、はい。ありがとうございます…」

最初はそんな、私を心配するような言葉だった。けれど、社用携帯に届く田村くんからのメッセージは、日に日に狂気を孕んでいった。

『浅野さん、今どこにいますか』『さっき誰の車に乗りましたか』『返事まだですか？』『俺を無視しないで』

明らかに一線を越えている。怖くなって返信を濁すようになると、田村くんの執着はさらにエスカレートした。事務所で目が合うたび、目は血走り、私を凝視してくる。

今日は兵頭さんに「送迎はできない」と言われていた日のことだった。早く帰ろうと荷物をまとめていると、背後から伸びてきた手に、ガシッと強引に腕を掴まれた。

見境のない力に、心臓が跳ね上がる。生憎、他の組員たちは会合で組長について行っており、事務所には私と田村くんの二人きりだった。

「ひっ……!!」

「浅野さん、なんで避けるの？」

「やめて、離してくださいっ！」

怯えたような田村くんの形相は、ただ恐怖でしかなくて、腕を振り払って逃げるように家に帰った。あの時の田村くんの恐怖に満ちた目が頭から離れなくて、その夜は一睡もできなかった。



翌朝、出社すると玄関に組長が立っていた。

「昨日、帰り際大丈夫じゃったか」

「……え、なんで」

「田村と話しとったじゃろ。顔色、悪そうじゃったけえ、気になっとったのう」

昨日、会合でいなかった組長は私の退勤時を知っている。私は面接の時、部屋

の隅にあった大きなモニターに、いくつもの防犯カメラの映像が映っていたのを思い出した。(きつと、事務所のどこかにもあるんだ……)——そう思うと、いつもなら怖いはずなのに、その時の私は少しだけ安心してしまった。田村くんのこと怖かったから。

「大丈夫、です」

「ほんまか？わし、つむぎちゃんが辛そうにしとったら、悲しいけえのう」

少しだけ眉毛を下げて困った様な顔をしている。

「はい、ご心配をお掛けしてすみません。」

「謝ることなんかないんよ。なんかあったら、すぐわしに言いんさい。約束じゃけえのう」

組長が小指を差し出すと、私はおずおずと小指を絡めた。



数日後、田村くんが突然いなくなった。

出勤すると隣のデスクが空だった。最初から誰もいなかったみたいなのに、きれいに片付いていた。

「あれ？田村くんは？」

「……ちょっと、色々あって」

組員の1人に聞くと、目を逸らされてしまった。すると、組長が顔を出した。

「色々あってのう、辞めてもらったわ。うちには、うちのルールがあるけえ」

少しだけ困った様に笑っていて、詳しく聞き出そうとしたけれど、聞いてはい

けないと第六感が言っている気がした。

「つむぎちゃん、お昼まだじゃろ。一緒に食べようや」

組長がいつも通りの懐っこい笑顔でこちらを見ていた。

◇

その夜は、特に予定もなかった。ベッドでぼんやりつけたテレビが、ストーリーカー被害の特集を流していた。

「警察に相談したら、もらったぬいぐるみから、GPSが出てきて。充電器には、盗聴器が仕掛けられてたんです」

——指先が冷たくなった。ぬいぐるみ。充電器。頭の中で何か音が立てた。

組長からもらった黒い猫。社用携帯と一緒に渡された充電器。そして私が車を断ってコンビニに寄って一人で帰ったのに組長は知っていた。ランチの店も、すき焼きが好きなことも、私が田村くんとの通話でしか話していないことも。私が誰にも言っていないことを、組長はぜんぶ知っていた。

震える手で、猫のぬいぐるみを握ってみると硬かった。縫い目をよく見てみると、後から縫い直された跡があった。化粧ポーチから小さなハサミを取り出してゆっくり切り開いてみると、綿の中から白くて小さい丸い物が出てきた。

AIに写真を送りつけると、販売元のURLと共に説明文が表示された。

【これはイメージング会社より販売されている小型GPSで、最長半年間の使用が可能】

「…」

私はスマホをぱいっと投げ捨て充電器のソケットを抜くと、隙間をハサミでこ

じ開けた。中にはテレビで放送されていた同じ様な小型マイクが入っていた。

私生活が全部筒抜けだった。どこにいるか、何を話しているか。家の中の独り言までもだ。親切だと思っていたのも、過保護だと思っていたのも全部が監視する為の優しさだった。

逃げなきゃ、と思った。体が素早く動いて財布、保険証、通帳。とにかく鞆に詰め込んだ。今夜のうちに、ここを出なければと思ったが手が止まった。

逃げて、どこに行くんだろう。

貯金もほとんどない。新しく家を借りる？仕事は？支払いは？私の生活はいつのまにか組長に支えられていた。お弁当、帰りの車、給料。逃げた先に、何があるんだろう。頭では逃げろとわかっている。なのに、足が動かなくなった。恐怖と、それと同じくらい、私生活を手放してしまうことへのためらい。それに、組長の優しさが全部嘘だったとは思いたくない自分。葛藤が頭の中をぐるぐると渦巻いた。その夜は鞆を枕元に置いて、何度もドアの前まで行った。

◇

「つむぎちゃん、ちょっとええか。3階行こか」

翌朝、私は目の下を真っ黒にして出社すると組長に呼ばれた。階段を上る。一段ごとに、足が重くなる。組長がドアを開けると私は後に続いた。座る様に促されて、革張りのソファの端に、小さくなるように座る。

——かちやり。

組長がドアに鍵をかけた。その音がやけに大きく聞こえた。

「な、なんで、鍵を」

「まあええけえ。気にせんでええよ」

組長は向かいに腰を下ろし、私の鞆にゆっくりと目を向けた。

「猫ちゃん、どうしたん？」

心臓が跳ねると同時に咄嗟に口が動く。

「…か、金具が壊れてしまって。家に置いてきました」

「ふうん…。そういえば、昨日のテレビ。途中で途切れてしもうて、続きが気になったわ。つむぎちゃんも、観とったじゃろ？」

大きく唾を飲んだ。この人は全部知っている。昨夜、私が何を見て、何に気づいて、何をしたのか。充電器を抜いた瞬間に盗聴が切れたことまでわかっている。私に嘘をつく隙を与えている。

「素直に話してくれたら、わしも、いろいろ教えてあげようと思うとったんじゃけどねえ。嘘つく子は、悪い子じゃ。悪い子は——わしのそばに、おらんといけ

んよ」

部屋の空気が変わった。組長がポケットからスマホを取り出した。

「田村が、おらんくなつたん、知つとるじゃろ？」

画面を私に向けると、再生されたのは薄暗い地下室のような場所で撮った動画だった。

血塗れで床に転がっているのは、間違いなく田村くんだった。その髪を見覚えのあるゴツゴツとした大きな手が容赦なく掴み上げ、カメラに向けさせる。

『ひ、ひいっ……！ すみません、もう浅野さんには付き纏ったりしません！  
二度と近づきません！ だから、もう、命だけは……！』

画面の向こうで、田村くんがポロポロと涙を流しながら、恐怖にガタガタ震え

て命乞いをしている。その頭上から、信じられないほど冷酷な、けれど聞き慣れたのんびりとした声が降ってきた。

『田村あ……。お前さん、わしのつむぎちゃんに御託並べて、必死にちよっかい出しとったろう。わしのもんに手え出してええと思っとんか？邪魔なんよ。つむぎちゃんを怖がらせてええのも、泣かせてええのも、わしだけじゃ。わしの獲物を連れ去ろうとするヤツは全員こうなるんよ』

ドカッと鈍い音がして、動画はそこで途切れた。

頭の芯が、完全に凍りついた。この男は「自分の女に手を出した不屈き者」として、ただの暴力で叩き潰した。

「ああ、そんな怖い顔せんでええよ。つむぎちゃんには関係ない話じゃけえ」

組長はスマホを仕舞うと、目尻に深い皺を刻んで、いつもの懐っこい笑顔を浮

かべた。

「そう、わしがあいつを遠くにやったんよ。あいつ、必死につむぎちゃんを連れ出そうとしたろう？ 気持ち悪いのお。わしの獲物に手を出そうとするけえ、ああなるんよ。なあ、嬉しいじゃろ？ わし、つむぎちゃんがわしの元から逃げてまうのが一番嫌なんよ。じゃけえ、悪い虫はちゃんとお仕置きして、二度とこへ来んようにしたけえね。全部、つむぎちゃんのためじゃ。わかるか？ GPSも、盗聴器も、ゼーくんぶつむぎちゃんのためにやっとなんや。」

大きな手が私の頬に伸びてくる。

——わかる、とは、言いたくなかった。監視はおかしい、支配は間違っている。田村くんのは、許されない。頭ではぜんぶわかっているけれど恐怖に駆られて私は言葉を絞り出した。

「……わかります」

口にした瞬間、自分の声がひどく遠くに聞こえた。

「ん、ええ子じゃ」

組長がゆっくりと立ち上がると、私の方に向かってきて大きな手が私の肩を掴んで、ソファに押し付けた。逃げられない重さだった。組長は相変わらずニコニコしていた。

「逃げてもええんよ。つむぎちゃんの好きにしんさい。：ほいでも、わしがどこまでも迎えに行くだけじゃけえのう」

組長は私の顎に手を添えて上へ向かせると、唇を唇に押し付けてきた。

「っ…!!」

タバコの苦い香りが鼻腔に流れて眉間に皺を寄せ、胸板をぐい、と押し返して離れようとする。後頭部に手を回されてホールドされた。

「なあ、いやなん？ 悪いことから、全部守っちゃったのにのう。その仕打ちはなかるうや。わしは、ずっと見守っとったんよ？」

「だ、ダメです組長っ…、こんなこと…ッ」

「直哉って呼びんさいや。」

「っ…、」

唇をペロりと舐められて口内に侵入させようとされるが、私は口をぎゅっと閉じていると、鼻を摘まれて息ができなくなる。

「んっ…」

「息、苦しいじゃろ。素直に開けんさい」

限界を迎えて小さく唇を割った瞬間、待っていたとばかりに熱く分厚い舌が滑り込んできた。上顎をゆっくりとなぞられ、逃げようとする舌を捕らえては、絡めとるように優しく吸い上げられる。タバコの苦味と大人の男の体温、それに香水の匂いが混ざり合って、嗅覚から直接脳の奥深くまで流れ込んでくる。

息継ぎすら許されないまま、どれくらい口内を貪られただろうか。

「ぶはっ……あ、はあっ、はあ……っ」

「ふふ……ええ顔しとるね、つむぎちゃん。もっとわしの匂い、覚えといてな」

チュツ♡と最後に軽いリップ音を響かせて唇が離れると、組長はひどく甘い声で囁いた。

抵抗しようとして彼の胸板を押していたはずの両手は、酸素が足りないせいか、すっかり力が入らなくなっている。酸欠で頭がぼんやりと白く濁っていく中で、後頭部を抱え込む大きな手はやけに温かく、まるで泣く子をあやすようにゆつく

りと私の髪を撫で続けていた。

(逃げないと…っ)

頭の片隅で警鐘が鳴っているのに、背中を撫で下ろすゴツゴツとした手のひらの心地よさに、恐怖の輪郭がドロドロと溶け出していくのがわかった。

「充電器も猫ちゃんもバラバラにしてしもうたねえ。大丈夫、怒っとらんけえ安心しんさい。」

耳元で低く掠れた声で囁かれるとゾクツと背筋が凍る。耳たぶを甘噛みして、耳の輪郭をれるお…♡と舐めながら私の腰からお尻のラインを服の上からゆっくりとなぞるように滑り落ちてきた。

「ひっ…や、やめてくださいっ…」

「給湯室の茶葉取る時、一生懸命背伸びしとるじゃろ？お尻の形が丸見えじゃったけえねえ。それ見るたびにいつつもムラムラしとったんよ…」

「く、組長っ…」

「直哉、やろ？」

「あっ…」

首筋をがぶッと噛まれて首筋に鋭い痛みが走り思わず背中が跳ねる。だが、痛いのは一瞬だけで、すぐに組長の熱い舌が噛み跡をじっくりと舐め上げた。

「やだ…うう…」

ソファに爪を立てていた指先は、じわじわと力が抜けていく。首元に押し当てられた組長の額から、ものすごい熱と荒い吐息が直接肌に伝わってくる。いつもあんなに余裕たっぷりですべて笑いかけて来る組長が、獣みたいに余裕をなくして私を貪っている。

「……ああ、ホンマに堪らん。この匂いも、この柔らかい肌も、ぜんぶわしのものじゃ。のお、田村とそんなに話して、楽しゅうしとったん？わしとはちっとも話してくれんのに。GPS仕掛けてほんまによかったわあ。田村の家とかラブホテルにも行っとらんみたいじゃし、わしは最初の方、てっきり田村と出来とるんじゃなからうかって不安じゃったんじゃよ？けど、わしの思い違いじゃと分かった時から、イヤホンから聞こえてくるつむぎちゃんの生活音の一つ一つが、可愛うて可愛うて、たまらんくなって……。毎日、つむぎちゃんの息づかいとか、独り言とか、全部聞いて胸が締め付けられてたんじゃ」

「いやっ…やめてくださいっ!!誰かっ…!!」

「誰も来んよ、つむぎちゃん」

耳元で楽しそうな声が響いた。私の必死の叫びを気にも留めない様子で、目尻に深い皺を刻んでにこりと笑った。

「ここは事務所の一番奥、わしの部屋じゃけえね。わしの許しがなけりゃあ、若いもんも誰も入ってこれんし、誰も助けにや来やせんよ。そんなに声を張り上げたら、喉が痛うなるだけじゃ」

「ううっ…」

「田村がつむぎちゃんに気があるとわかってから、注意深く見張ったんじゃけど、やっぱりちゃんと田村を監視しといてほんまによかったわ。あのままじゃったら、わしのつむぎちゃんが怖い目に遭うとったかもしれん。だからつむぎちゃんが家から外に出るたびにチェックして、危ないところに行かんように、ずっと見といてよかったんじゃ…。危ない目に遭わないようにちゃんと見守つといてよかったのお」

「あ…やだっ…っうう、」

「大丈夫じゃ、怖がらんでええけえ。」

恐怖でガタガタと震える私の身体を、まるで壊れ物を扱うかのように愛おしそうに、大きな身体で包み込むようにしてソファへと組み敷いた。その圧倒的な質

量と力の前には、私の抵抗など無意味だった。そのまま私の顎をもう一度強引に上向かせると塞ぐように唇を重ねてくる。今度のキスは、さっきよりもずっと深くて強引だった。口の奥まで熱い舌が突き入れられて、隅々まで舐め回される。

「んむ、ちゅ……あ、んっ……!!」

「っは…、あんまりわしを困らせんでよ。つむぎちゃんが可愛すぎて他の男と仲良う話すだけで、ヤキモチで胸がはち切れそうじゃったん。じゃけえむぎちゃん、わしのことあんまりいじめんで？」

私の足の間にぐいぐい割り込んでくる組長の太ももは、岩みたいに硬くて、圧倒的な力で逃げ道を塞いでいく。いつもニコニコと笑う顔が、すぐ目の前で信じられないくらい雄の顔になっていた。ギラギラとした目つきで見つめられると子宮がきゅう…と締め付けられる感覚に陥ってしまう。

「く、組長っ…」

「直哉って呼びんさい言うたじゃろ？なんで分からんのん。何回言ったら分かるんね？」

優しく諭す様に耳元で声が響くと、器用にシャツのボタンを外しながら首筋に唇が落とされた。吸い上げられるような痛みに変わり、やがて痕となって私の肌に刻まれる。

「これでつむぎちゃんが誰のもんか、よう分かるようになったのお」

組長は嬉しそうに笑うとブラジャーのホックを外して、肩紐をゆっくりりずらし、私の胸を露わにした。冷たい空気に触れて乳首がじわじわと硬く尖るのを、組長は熱い目でじっくり見つめた。

「つむぎちゃんのここ、こんなに可愛いんじゃない。」